

対談

台風19号による千曲市災害廃棄物 処理の支援について

Guest：一般社団法人愛知県産業廃棄物協会 災害廃棄物処理対策に関する「特別委員会」
委員長 山本浩也氏、副委員長 永井弘児氏
一般社団法人愛知県産業廃棄物協会常務理事・広報編集副委員長 新美 三良氏

Interviewer：一般社団法人愛知県産業廃棄物協会副会長・広報編集委員長 中野 兼司氏

中野：今回の対談は「台風19号による千曲市災害廃棄物処理の支援について」と題して、災害廃棄物処理対策に関する「特別委員会」委員長 山本浩也氏（株式会社ダイセキ環境ソリューション取締役副社長）、副委員長 永井弘児氏（永一産商株式会社取締役）、常務理事・広報編集副委員長 新美三良氏（有限会社三洋サービス代表取締役）の方々にお越しいただいております。

始めに山本委員長から千曲市の災害廃棄物処理の支援に至った経緯をご説明いただけますか。

山本：今回の災害は台風19号がもたらした豪雨で、長野県の千曲川が氾濫して長野県内の多数の住宅、また、エリアに浸水の被害を及ぼし大量の廃棄物が発生して令和元年10月13日に発災をしています。

そうした中で長野県内、主に長野市、千曲市では大量の災害廃棄物が出て、県内だけでは対応できないことが判明しました。それに対して、災害廃棄物中部ブロック広域連携計画（環境省中部地方環境事務所が所管する大規模災害時廃棄物対策中部ブロック協議会にて策定）に基づき、長野県が被災した場合は、富山県が中心的に支援をするということが事前に決まっておりました。

まず、富山県の産廃業者と産業廃棄物の協会が支援をすることになり、当初は長野市へは富山県内の処理業者である株式会社富山環境開発と株式会社アイザックの2社が災害廃棄物の処分、仮置場の管理ということで支援に入りました。

また、千曲市においても災害規模が大きく支援が必要でしたが、富山県は長野市の一部の支援で手いっぱいでした。それで、富山県から岐阜県、石川県へと支援の要請をしましたが調整がつかず、愛知県と三重県に要請が入りました。愛知・三重の各県はそれぞれの県から産廃協会に支援の打診があり、三重県は三重中央開発株式会社³が中心となり支援を行うことになりました。愛知県は一般社団法人愛知県産業廃棄物協会（以下「愛産協」と称する。）に支援の要請があり、役員と事務局で検討し理事会に諮り千曲市の支援に取り組むこととなり、愛産協として千曲市の災害廃棄物仮置場の管理、災害廃棄物の収集運搬、処理の支援を担うことが決まった、という流れが一連の経緯です。

中野：ありがとうございます。そういった経緯で臨時理事会を経て承認され、愛産協として受託する形になりました。その中で、山本委員長と永井副委員長の責任者としての率直な感想、その時の状況や心情については如何でしたか。

3 三重中央開発株式会社（三重県伊賀市予野字鉢屋 4713 番地）



災害廃棄物処理対策に関する「特別委員会」委員長 山本浩也氏

1 株式会社富山環境開発（富山県富山市柳町一丁目2-9）

2 株式会社アイザック（富山県魚津市大海寺野 1181）

永井：私は災害廃棄物処理対策に関する「特別委員会」の一員として、今回千曲市における災害廃棄物処理の支援に携わりました。

まず、千曲市から支援要請がありましたので10月30日に長野県庁において、環境省の方、長野県の方、千曲市の方と会い、災害廃棄物処理支援の概要について3名で（山本委員長、永井副委員長、松竹氏⁴）説明を受けました。

支援への強い想いはありましたが、何をどう応えてよいのか、協力会社はどれくらいか、人員は何名派遣できるのか、愛産協での具体的な支援体制が定まっていない中、回答に戸惑いました。

しかし被災地からの、今すぐ、今日からでも、というSOSの声は私たちの胸を熱くしましたので、その求めに一日でも早く応えるべく、体制を速やかに整え、災害廃棄物処理の支援に向かいたいと思いました。

中野：そういった思いも含め愛産協に協力を求めたところ、多くの会員企業が手を挙げてくださったとのことですが。

山本：永井副委員長からお話しがあった通り、どれくらいの協会の方のご協力がいただけるのか、という不安はありましたが、その場では愛産協として取り組みたいと回答をしました。

そのうえで、千曲市災害廃棄物処理の支援への協力を募ったところ、52社から協力の返答をいただきました。多くの会員の皆様からの復興への温かい支援の想いは、そのリストを拝見しただけでも強く感じ取ることができ、大変うれしく思いました。

特に支援に携わる時期は季節的にも私たちの業界においては繁忙期に当たり、車もなかなか無く、人手不足で自分の工場を回すのも困っている、というのが現状です。焼却や中間処理の施設においても、荷物は多く、置き場もいっぱいであるという話を日常的に耳にしていたので、そのような繁忙期にご支援いただいたというのは大変心強く、また、ありがたく思いました。

中野：愛産協会員としても誇りに思うようなコメン

トをありがとうございます。

協会員の皆様のご協力をしてくださる中、忙しい時期にも関わらず協力への気持ちに至った、何故その意思を持たれたのか、について協会員の声をお聞きしたことはありますか。

山本：直接的には現地に来てくださった重機のオペレーターの方、選別の作業員の方などからいろいろなことを伺いました。

その方々は、会社のトップである社長が“こういう状況（繁忙期）ではあるが、協力しよう”、“当社はこういう時（被災地が支援を求めている）にこそ協力するということが経営方針である”という判断の下に支援を決められたと聞きました。

また、その中でどのようにして皆様が来ることが決まったのですかの問いに対して、社長からの指名で『当社の代表として行ってきてください。1週間頼みますよ。』と言われ、社内からの声援も受けて送り出された方が多かったです。

中には、『“こういう支援の要請が来ているので会社としては支援をしたいと思う、行きたいと思う人はいますか。”という問いかけがあり、私は立候補して、志願して来ました。是非こういった被災地に貢献できるような仕事がしたかったのです。』と話される方もいました。本当にうれしかったです。

中野：非常に心強く、将来に向けてのアピールも含めとても大切なものが得られたような気がします。

永井副委員長は現場に長く滞在されていたということでしたが、現場の状況は如何でしたか。何か印象に残る出来事があればお話しください。

永井：一番印象深いのは現場に入った直後でした。

現場では既に隣の仮置場で、三重中央開発（株）



災害廃棄物処理対策に関する「特別委員会」副委員長 永井弘児氏

4 株式会社ダイセキ環境ソリューション事業推進部長 松竹冬樹氏

対談

のトラックやトレーラーが10台ほどが頻繁に災害廃棄物を搬出しており、私たちはこれからどこの会社をお願いをすればいいのか、協力していただけるのか、というのを不安な思いに駆られながら、今思えば、その場に立っていたのが印象深いです。

また、『この災害廃棄物の受け入れは現地確認後』、と愛産協会員の大半が回答されることを考慮すると、割り当てられた処分量の消化についても不安でした。

手探り状態でのスタートでしたが、現地の確認にお越しいただいた愛産協会員の方々の反応は、『引き受けますよ!』、『これだったらこの方法でできます!』と力強い答えをいただき、その時やっと安堵できました。こうして協力者の方々の力を得た途端、現場が活気付き、二週間目からトラックが順調に集まり、みるみるうちに山積されていた災害廃棄物が無くなり、終わりが見えてきた時は感動しました。

私たちが管轄していた仮置場は、「旧名月荘」という温泉宿の跡地と、千曲市の「市営グラウンド・野球場」で地元の人の散歩コースでした。

仮設事務所は大きな体育施設の一角にあり、始業時と終業時に、飛んでいってしまったプラスチック片やごみを全員で片付けていると、近隣の方々が『ほんとうに助かるわ』、『ありがとうね』との声かけがありました。災害廃棄物が日ごとに少なくなる様子を見て、『早いね、すごいね』、『こんなに早くごみが無くなるなんて、思いもしなかった!』と多くの住民の方からの声援や、喜ばれる姿を拝見して、なによりこの仕事に従事していて良かったと思ひ、多くの方を笑顔にできる仕事に誇りを持ってました。

中野：現場では疲労や心労などが蓄積されたと思いますが、地元の方からの多くの感謝の言葉をいただくと、もっと頑張ろう!というパワーにもなりますね。素晴らしいご経験をされたと思います。

声援は地元の方が声をかけてきたのですか。

永井：現場は危ないので一般の方は入れないようにしていますが、ゲートの所から覗き見る形で作業状況を見て声かけをされてきました。その時々、進展具合などを説明することもあり、進捗状況に安堵

されていました。

約一か月間仮置場に滞在し千曲市の職員の方と業務を進め、わずか一か月余りでしたが、市職員の皆様方とは業務を通じて親しくしていただき、行政の方との顔の見える関係づくりを実践できたのではないかと思います。

中野：最初はやはり何をどう応えたらよいか、何をどう進めていけばよいか、という迷いが生じていたと思います。しかし、廃棄物処理のプロなので直ぐに慣れて処理作業がスムーズになったと思います。また、処理作業を進めていくうえでこうしたらよいのではないかと、といったことはありましたか。

山本：だんだん現場の状況にも慣れて良くなっていったということはあったと思います。

現場の管理をしながら、分別もしながら、搬出もする、という同時進行の状況下で業務を遂行していましたので、そういう意味では分別方法、出荷の段取り、車輛の待機場所、積載場所、仮計量、写真撮り、出荷、というルーチンは日を追うごとにスムーズに処理できるようになりました。

永井：現場が動いていく中で、選別や運営については日を追うごとに慣れていき、提出書類関係についても徐々に整っていくので、最後の方は余裕を持って管理することができるようになりました。

最初に現場に入った時点では、混廃はある程度大まかに分けたら、愛知県内の混廃施設、選別施設を持っている業者に振り分ければよいと思っていました。しかし、届け出を出す段階になって、法律上あれこれと難しいということから出せなくなってしまいました。

第一陣として乗り込まれた会員企業の方々が、最初に立てていた計画が、次の日になると行政側からできませんとの回答があり、一週目はその対応に追われ、当初の指示とは変わる内容の指導が出てくるので私たちはどうしたらよいか混迷しました。

作業に当たるオペレーターの方達からは、作業のやり直しに不満の声が上がりましたので、現場管理の板挟みの状況を伝え理解を得られるよう努力しました。

二週目からは決まった選別方法で出し方も搬出基準に合わせて用意をするという流れになり順調に搬出できるようになりました。

中野：今話を聞いて、産廃と一廃の垣根について、それが災害廃棄物を扱う時に非常に分かりづらい。実際に分かる人がどこにいるのですかという話しにもなるかと思います。そのあたりの諸問題はどうか。

山本：やはり災害廃棄物は一般廃棄物になりますので普通の産業廃棄物とは異なりますし、契約書もマニフェストも異なります。

あくまでも一般廃棄物ですので排出者は市町村ということになりますが、今回の場合は千曲市が排出者ということになります。ですが、千曲市は人口が6万人位の小さな市で災害廃棄物の専任者がいるわけではないし、こういった災害の経験があるわけはありません。そのような中で千曲市役所の担当者の方は発災以降休日返上で使命感を持って業務に取り組んでおられ感銘を受けました。

一方で複雑な課題では、支援に来ている環境省の中部地方環境事務所の方に確認しないと分からない、といったご返事をされることもあり、レスポンスに時間がかかるということがありました。

現場は日々動いているし目の前の廃棄物は処理しなければならぬ、搬出しなければならぬのですが明確な回答が、すぐには出ない。千曲市さんの立場に立てば致し方ないですし、無理もないと思いますが、我々からするととどかしい感覚もありました。

中野：新美広報編集副委員長も現地に行かれましたが、現場の感想をお願いします。

新美：私は11月後半に行きました。

現地に着いた途端、永井副委員長が一度仮置場を見てください、とのことからフェンスの外から山積された災害廃棄物を確認し、次の日に現場の作業者の方たちと一緒に搬出作業を行いました。

現場の仮置場は強風が吹く寒い環境下にあり、特別委員会の皆様、珍道氏、松竹氏の方々のご苦勞を目の当たりにしました。皆様のご協力があり、配車の手配がスムーズとなり、次の段取りも計画通り



常務理事・広報編集副委員長 新美三良氏

に進み、搬出先や受け入れ先が順調に決まりました。先ほどの話にあった、山本委員長や永井副委員長の蓋をあけるまで未知数であった状況が、徐々に良い方向に向かっているとのことなので、本当に感慨無量です。

ただ風の強さには驚き、バラで積んでいる物が飛んでいくので、周辺の後片付けが毎日大変だと実感しました。

永井：新美常務理事がお見えになった時は風が強かったのですが、普段は穏やかな気候で、幸い雨も2回しか降りませんでした。

山本：最終日の11月28日は雪がちらちらと降り、山の上の方は真っ白でした。作業をしていると山はだんだん白くなり、山裾は紅葉で赤く染まっているという、絵に描いたような初冬の地で作業をさせていただきました。

永井：そういえば、朝日が昇る前は-3℃でしたね。

新美：日陰にいますと本当に寒かったです。

山本：家電を積み込んでいると、洗濯機の水が溜まっていたところには氷が張っていましたよ。

中野：今話を聞いていると、支援期間は天候にも恵まれ、天も味方してくれたようですね。

ところで私たちの東海地区でもいつ災害が発生するか分かりません。その時に気になるのが制度上の問題点です。このような問題をどのように解決し、行政も含めて理解していただくには、どうしたらよいのかお考えはありますか。

山本：今回は全国でも初めてのケースとして、愛産協が被災地ではない県の協会として、被災地の支援をするという大変貴重な機会をいただきましたのでこれをよかったね、お疲れ様で終わらせてはいけないと思っています。

対談

今回の経験を基に総括をして報告書を作成し、いま中野広報編集委員長がおっしゃった、法制度上の課題、行政との関係の課題、一方で私たち愛産協の体制について、以下の3点を進めていきたいと考えています。

- (1) 愛産協から全産連に上げ、今回の件を全産連として環境省へ申し入れをするということ。
また、各県協会にも愛産協のケーススタディを水平展開をしていくことを考えています。
- (2) 地元愛知に災害があった時にしっかり私たちが貢献できるということが大事だと思いますので、同じようにまとめた報告書を愛産協として愛知県へしっかり申し入れをします。
- (3) 更に愛知県内の市町村に対しても今回の経験を伝え、災害廃棄物処理計画の具体化や役割分担について協力をしていきたいです。

災害廃棄物処理では初動が命であり、愛知県内で災害が起こった場合にはその計画に基づいて迅速に愛産協各支部・各会員が支援業務を実施できるようにしていきたいと考えています。

それが貴重な経験をさせていただいた私たちのある

意味での義務だと思っておりますので、今後しっかり取り組んでいきたいと思っています。

中野：ありがとうございます。永井副委員長から何かございますか。

永井：今回私たちは、産業廃棄物の団体であるため“一廃”、“産廃”という区切りが、大きな壁であったということを実感しましたが、解決していける方法を前向きに提案していきたいと思っています。

実は現実的な問題として、現場での人件費、収集

運搬費について尋ねられましたが、決めていなかったため具体的な金額の提示ができませんでした。

私たちは被災地支援に向かいますが、一方では営利団体としての運営があるため、単価が決まらないと動けないというのが正直なところです。

愛産協のBCP（業務継続計画）においては、地元においての災害廃棄物処理の価格が一律化されていますが、他県での場合、その他について、見直しが必要ではないかと思いました。

そして何より被災地で災害廃棄物の処理を待ちわびる方々の元へ向かいたいのに、諸事情で対応が遅れるジレンマは辛いですね。各制度を早急に整え、両者にとって有益である方向に向かって欲しいと切に願っています。

中野：確かに今のお話しは重要な課題だと思います。最低限の交通費としてガソリン代や人件費などは、お支払いしてあげないとせっかくの好意が実

現できません。最終的には国の方からそれなりの補助金が出るという話も聞いています。そのあたりを明確に、手際よく行動することは今後の課題だと思います。それも含めて「プロセスの見える化」がとても大切であり、総括に入ってくると思います。

今後のためにも前向きに議論していただき、次のステップに繋げていきたいと強く思いますので、最後に一言ずつ今回の件についてのコメントをお願いします。

山本：山積している災害廃棄物の中、現場は約10名、いろいろな会社、初対面の方々の混成部隊で約一か月、しかも皆様慣れない環境で慣れない仕事をしていただきましたが、事故なく終えることができたのが一番よかったと安心しております。



左から 山本特別委員会委員長、中野広報編集委員長、永井特別委員会副委員長、新美広報編集副委員長

あとは、本当に会員の皆様への感謝しかありません。冒頭に申し上げました通り、皆様ご自身の会社が繁忙期中、現地に来られた方は社長が推薦された各社のエースの方、立候補された方が来られています。私たちが大まかな指示、方針を伝えると各自でどんどん仕事を進めていただきました。現場が早く回ったのは彼らの優秀さのおかげです。

そういうことを考えても、運搬、受け入れ、処理をしていただいた会社様には、タイトな状況の中でご協力をいただいたこと、会員の皆様に深く感謝を申し上げたいと思います。

永井：私も山本委員長同様に、協力していただいた会員の皆様方には感謝の気持ちでいっぱいです。

協力してくださった多くの方々からは『困っているのならもっとトラック出しますよ』とか、処理できないので困っていると言えば『うちで引き受けるよ』と言ってくれたり、このような皆様方の厚意が今回無事に災害廃棄物処理の支援の完遂につながったものと思われま。本当にご協力を快く引き受けていただいたことに感謝の言葉しかありません。

それに対して、運営が滞るなど法制度上の問題が足かせになった一面が浮き彫りとなりましたので、これを教訓に見直しを進めるための一つの事例となればと思います。

最後に私たちが今回実践したノウハウを、地元愛知での発災時に教訓として生かすべく、具体的に展開することが今後一番の課題です。

新美：今回の支援では、若い方が積極的に動かれ道が切り開かれたという印象を受けました。

災害廃棄物処理支援において学ぶ事が多かったこの経験を、次は愛知県での発災時に役立ててください。これは次世代を担う産廃業界の若い方の役目だと思いますので、培った知識と実体験をぜひ愛知県のため発揮して欲しいと願っています。

山本：現場でも青年部の会社の方が常に2名ずつ交替で、最終日まで参加されていました。

中野：初めてのことで非常にやりにくい部分が多々あり、大変ご苦労されたと思います。

ありがたいことに地元の方に感謝されたり、会員の協力が非常に強いものがあったという素晴らしい

発見や出来事もありましたね。まさに、産廃業界が「ONE TEAM」となりましたね。

また、法制度上の問題、一廃と産廃の壁などの問題が浮き彫りになりましたが、やはり何が一番大切かということ、もう一度総括を交えて愛産協内で協議を重ね、先ほど山本委員長がおっしゃっていた、愛産協から全産連に、そして環境省に要請する、さらに愛知県や行政に対してより良い意見を「提言」していられることを大いに期待しております。

本日はありがとうございました。

対談日：2019年12月16日

対談記事の掲載にあたり、ご出席者の方々の現場の声やご意見、また、(株)ダイセキ環境ソリューションの方々から貴重な資料をご提供いただき感謝申し上げます。

被災地の一刻も早い復旧を願っております。

副会長・広報編集委員長 中野兼司

期間：2019年10月30日～12月6日

支援要請の内容

- ・災害廃棄物の仮置き場の管理・運営
- ・災害廃棄物の仮置き場からの運搬、処理及び処分

災害廃棄物の仮置き場

- ・場所：旧名月荘跡地隣接グラウンド
(長野県千曲市大字磯部 1144-4)
- ・容量：2,000m²～3,000m²

処理及び処分の方法

- ・仮置き場での分別(可燃、不燃、資源、廃家電等に分別)
- ・分別した災害廃棄物の運搬
(愛知県内の処理施設まで)
- ・災害廃棄物の処分(破碎、焼却、埋立等)

災害廃棄物一次処分量 (kg) (2019/12/6時点)

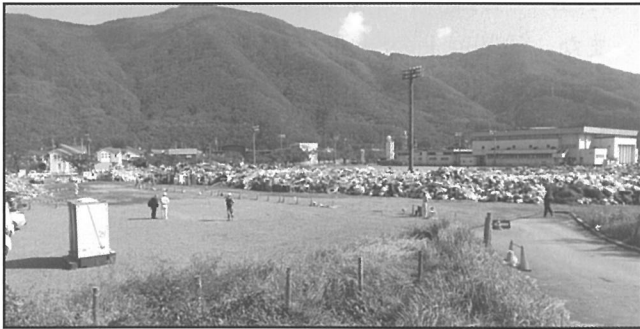
廃タイヤ (破碎・資源化)	18,460
畳、稲わら、その他可燃物 (焼却)	459,810
木くず (破碎・資源化)	54,780
廃プラスチック類 (破碎・資源化)	6,360
金属くず (破碎・資源化)	23,710
不燃物 (埋立)	118,670
合計	681,790

協力会員企業数

- ・運搬業務支援者：23社 (ダンプ95台)
 - ・処分業務支援者：16社
 - ・仮置き場の管理：運営業務支援者：15社
(延べ191名)
- 合計54社(うち10社重複)**

長野市千曲市・旧名月荘跡地仮置き場

協力会員企業 54社 (うち10社重複)



2019/10/30 全景



2019/11/11 作業開始



2019/11/13 積み込み作業



2019/11/15 上空からの写真



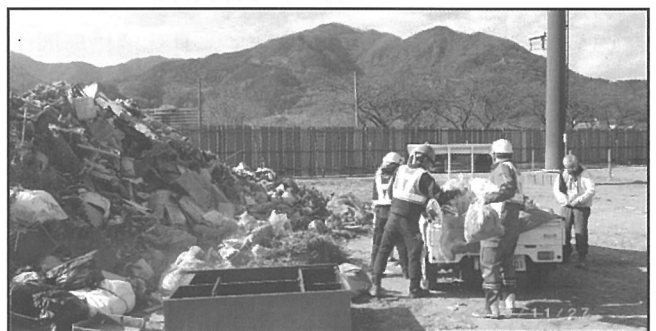
2019/11/16 作業状況



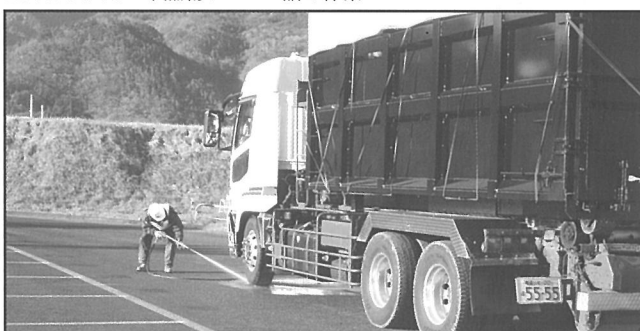
2019/11/19 作業にあたる方々 (一部の方)



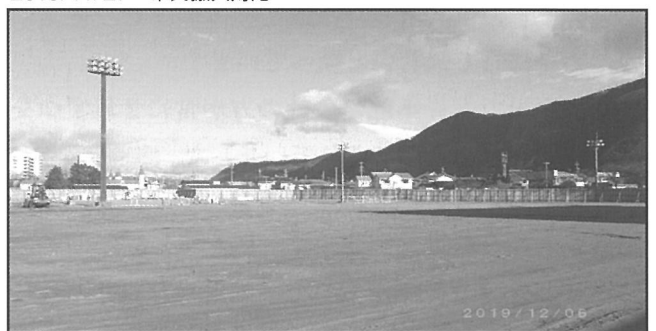
2019/11/19 不燃物フレコン詰め作業



2019/11/27 市民搬入対応



2019/12/3 洗輪作業



2019/12/6 作業完了、10/30画像の災害廃棄物を全て搬出